コロニア賛歌

勝連病院
吉田　朝啓

1962年4月、オランダの大型貨客船テゲルベルグ号は、沖縄の各地から集まったおよそ300人のボリビア移民を乗せて那覇港を出発した。琉球政府派遣医師として私も乗船した。これが私の海外渡航歴の始まりである。

船は、台湾海峡、ホンコン、シンガポール、ペナンを経由して、インド洋上の赤道を越えて南半球に入り、モーリシャス島、南アフリカの各都市、喜望峰、大西洋、南米ブラジル・リオデジャネイロを経て、およそ40日後にサントスに入港した。かなりの長旅である。移民の健康管理を担当する琉球政府医官としての待遇で、私の場合は一等船室での楽な旅ができたが、移民たちにとっては、老人も子供も、若い夫婦も三等船室の蚕棚同様の窮屈なベッドに押し込められての過酷な旅であった。年寄りや子供は、ただぐったりと寝るだけで夜を過ごせるが、新婚ホヤホヤの若夫婦はそういうわけにはいかない。蒸し暑くて窮屈な三等船室を健康管理者として見回っていたある日、ふと思いついて、一組の若夫婦に声をかけて、自室に呼び入れた。「これから船長との打ち合わせがあり、部屋を留守にするが、その間二人で留守番をしてくれ。丁度1時間後に帰ってくるから、内鍵をかけて、誰が来てもドアを開けないで、返事もしないで、二人で休んでいなさい。わかるね!」と、ウインクしたら、一瞬キョトンとしていたが、ポッと顔を赤らめて、うなずいた。

この愛の留守番担当は若いカップルのグループで評判が良く、船旅が終わるまで次々と行われた。航海も後半に入り、大西洋を渡る頃になると、中年の夫婦まで留守番と部屋の掃除を申し込む者が出て、結構繁盛した。

1962年5月：40日の航海の後、サントスに上陸した筆者（左から3人目）を迎えた、在伯沖縄県人会の先輩たち。白服の紳士は通訳、世話人の中国人。

サントスに上陸してからの10日間の汽車の旅も難儀だった。豪華客船の一等船室とはガラリと変わって、私の座るところがなく、客室に積み上げられた荷物の上にくぼみを作って、寝起きせざるを得ない。移住者リストにない単身赴任の私なんか、乗せてもらっただけでも有難いような、要するに臨時編成のおんぼろ移住列車旅行であった。

トイレがまた恐ろしくお粗末で、しばしば便器が詰まって、溢れた屎尿が客室の方へ流れ出る始末。途中の駅で停車するたびに、総出で清掃して旅を続けざるを得ない。

その内、風邪も流行り出した。手持ちの薬で対応するだけで車上のはやり風邪も収まったが、薬よりも効いたと思われたのは、停車する駅ごとに地元の沖縄出身戦前移民によってどっさり届けられるパン、バター、ミルク、ハム、ジュースなど栄養豊富な食料の差し入れであった。有難いことに、ブラジル東海岸から西のボリビア国境に至るおよそ2,000キロの鉄道沿線には、戦前の沖縄県人移民が定住していて、戦後の移民が汽車で目の前を通過するたびに、食料品などを持ち寄って激励することが通例となっていた。先輩移民にとっては、このボランティア活動が、自ら数十年前に体験した移住の苦しみを思い出させ、新移民がさらに大陸の奥地に行こうとするのを無視・看過してはおれない心地にしたのではないだろうか。

ウチナーンチュ（沖縄県人）の温かいチムグクル（肝心・心根）を旅の途中でたっぷり注ぎ込まれた新移民たちは、感謝と同胞愛に胸と腹を膨らませながら一路西へと旅を続けた。ボリビアのサンタクルス駅に着いたときも、多くの先輩移民のみなさんに歓迎され、みな武者震いをするほど勇気が湧いた様子であった。

ジープに揺られてたどり着いた第二コロニア（移住地）は、アマゾン上流地帯ジャングルの中にあった。樹高30メートル余の巨木が、緑の壁をなしてコロニアのセンターを取り囲んでいる。赴任先の診療所には、医療器具はなにもなく、私が持参した聴診器と顕微鏡（医学部時代に級友と共同購入し、卒業時私が買い取った記念の品）だけである。心細いやら情けないやら。お蔭で半年から1年の間は、最小限の器具と薬などの整備に費やされた。経験不足の若い医者に加えて、全く貧弱な設備での不安は尽きない。こういう場合、病気が発生したら、コロニア現地でできるものと、手におえないものの仕分けをまずしなければならない。沖縄を発つ前に、先輩医師にいわれた心構えを思い出す。

医療の世界で、「手遅れ」には二通りある。病人およびその家族の側の遅れ（patients delay）で重大化するものと、医者の能力を超えるものをモタモタして引っ張ってしまい、手遅れにしてしまうケース（doctors・delay）である。これは、僻地にいる新米医者の心得ておくべきポイントである。

そんなことは、重々弁えているつもりでも、お産のときは、微妙である。そもそもお産というものは、動物全般に共通していて、病的現象でもなんでもなく、医者や助産婦なしでもさらりとすませるものだが、人類は万が一に備えてまず助産婦を用意し、医者を侍らせた。コロニアでは、まずお抱えの助産婦さんが往診をするが、ちょっとでも自信がない場合、ドクターが呼ばれる。だが、ドクターは若くて産婦人科の専門ではないときている。研修医時代、一応お産の介助くらいは手ほどきを受けるし、沖縄出発前に産婦人科で短期間の特訓を受けるのだが、助産婦が危ぶむものを引き取って、ジャングルの真っ只中でお産を完遂させる絶対の自信はない。そこで、陣痛促進剤などでいろいろ試みるが、妊婦の夫や家族が疑わしい目で凝視している時、つい、100キロ離れたサンタクルス市の大病院のことが頭にちらつき、ジープによる搬送を指示せざるを得なくなるのである。えてしてこういう場合、搬送途中で妊婦が揺られて、陣痛が促進され、お産が始まることが少なくない。そういえば、かつて、移住地から少し離れたフィンカという牧場近くで陣痛が始まり、産湯なしで生まれた子がいた。後でミス・フィンカと名づけたが、いま、数えて40歳、元気だろうか。

ところで、診療所に満足な器具は揃っていないし、門前市をなすほどの患者が来るわけでもない。一日中診療所の中で病人を待っているわけには行かない。

森に入った移住者は、沖縄から様々な病気を身につけてそのまま働いている人も少なくないだろう。当時の沖縄は、回虫、十二指腸虫、ぎょう虫、糞線虫などの腹の虫やフィラリアという住血糸状虫が蔓延していて、それをそのまま腹に抱いて南米に来た者も多いはずである。これらの寄生虫は、人の命を奪うほどの病害性はないが、貧血をもたらす十二指腸虫、胆道に迷入して激痛を起こす回虫、肺結核に紛らわしく、時に喀血や猛烈な下痢を起こす糞線虫、そして乳房や睾丸が腫れたり、足が象のように大きくなったりするフィラリアなどのように、労働力を甚だしく消耗させてしまう。特に、フィラリアは放っておくと年々後遺症がひどくなり、やがて不可逆的な障害をもたらす。幸い、自分の研究のためもあって、顕微鏡1台は持参してあるので、これを活用して、第一、第二、第三コロニアの全員を対象に先任のT医師（第一コロニア診療所）と共同で、フィラリアとすべての腸内寄生虫の一斉検査をやることにした。

フィラリア仔虫は、不思議なことに夜間だけ血の中に現れる。だから、真夜中に検査道具を引っさげてジャングルの中に分散する移民小屋を一軒一軒回るのは大変だ。でも、「これをやらなければ、移住事業は難渋する。ここでは、難しい高度な医療はできない。まずは、2年間の滞在期間中に、あらゆる寄生虫を一掃することに専念しよう」と、必死の戦いが続けられた。

ある日、馬を駆って緊急往診を依頼して来た青年がいた。「父親が物凄い下痢で、今にも死にそうだ」という。ジープを駆って往診する。なるほど憔悴しきった中年男性が、ボロ切れのようにゴザの上に横たわっている。目も頬も落ち窪み、いわゆるコレラ様顔貌である。コレラだったら一大事。組合事務所とサンタクルス市の当局に通報し、組織的に手を打たなければならない。でも、恐る恐る採便して持ち帰り、顕微鏡で見た視野の中に、コレラ菌とは似ても似つかない糞線虫で、大蛇のようにくねる無数の幼虫を発見したときは、正直いってバンザイを叫びたくなるほど嬉しく、安堵したものである。はるばる顕微鏡を運んできていてよかった!糞線虫なら、家族への感染を防ぐだけで、防疫は簡単である。

森の中の診療活動にも慣れてきた。

第二コロニア本部広場には、製材所、精米所、教会、学校、組合事務所などがセンターに集合していて、そこには多くの若者たちが本部職員として働いていた。夕方になると、製材所の職員は鋸くずだらけ、精米所は糠だらけのまんま、診療所のドアの前に集まって、事務職や学校の若い教員が引き上げてくるのを待っていた。

これから、合唱の練習が始まるのである。その頃、コロニアの小学校には、隣国ペルーからボランティアでやってきた日本語のできる沖縄二世が4名もいて、正規の課程が進められていたが、4名とも日本の小学校唱歌は教えられない。そこで、診療の傍ら、私が引っ張り出されて、「ふるさと（うさぎおいし）」「夏は来ぬ」「われは海の子」など、目ぼしい歌を私が担当して子供たちに教えることになる。だが、これは鬱屈していた私の魂の癒しにもなった。

南米大陸の、海岸線を持たない内陸国のボリビアで、子供たちと「われは海の子」を合唱するのも妙なものだが、海洋国日本の、島嶼県沖縄をふるさとに持つ移民の子達に、あえて海洋民族の気概を吹き込んでおくのも悪くないと考えた。

一方、青年たちの場合は、国を出てから小学校の歌なんか口にしたことがなく、朝から晩まで真っ黒になって働くばかりである。ジャングルの中で、ただ働くだけではいくら若くても精神衛生上よろしくない。コロニアの将来を担う青年たちが明るくたくましく毎日を過ごすにはどうしたらいいか。声を揃えて歌う方が手っ取り早い。そこで、一計を案じて、本部で働く青年たちを集めて、夕方1時間だけのコロニア合唱団を立ち上げ、練習するようになったのである。まず、小学校と同じ唱歌を一通り習って後、替え歌「コロニア賛歌（雪山賛歌改変）」を歌うことになった。

「モンテよパンパよ　われらが宿り
俺達や　サンタクルスにゃ　住めないからに。
モータクーの小屋でも月見はできる
雨が降ったら漏れればいいさ。荒れて狂うは
あのリオグランデ　俺達やそんなもの
恐れはせぬぞ。ふるさとさよなら　ご機嫌よろしゅう　また会うときにも笑っておくれ。」

けだし、沖縄の高校を出た青年でも、当時の青年歌集に載っていた「雪山賛歌」を知っている者はなく、ましてやその替え歌などメロディーも歌詞も知っている者もいない。しかし、モンテ（森）もパンパ（草原）もモータクー（椰子）もみな目の前にある自然物なので、青年たちはすんなり受け入れて歌ってくれた。替え歌なんて気づくこともなく、セルベーサ（ビール）を飲み飲み、蛮声を張り上げて歌う青年たちは、とても明るく純粋で頼もしかった。変ホ

調コロニア風合唱団のメロディーは滅茶苦茶だが、メンバーの中には、豪華客船の一等船室で私の代わりに留守番をしてくれた者も数名いて、みんな気心の知れた仲間だった。

にわか作りのコロニア合唱団が帰って後は、診療所のある本部周辺はひっそりとしてジャングルの静寂に戻る。得体の知れない動物の鳴き声や虫の声が聞こえて不気味である。しかし、満月の夜は別である。組合食堂で軽く夕食を済ませた青年たちが、三々五々広場に集まって、にぎやかに沖縄相撲をやる。診療を済ませた私にも呼び出しがかかった。青年たちの肩越しに見物していたら、いきなりＧ君が私を引っ張り出して、荒縄を私の腰に巻いた。気がついたら、目の前にゴリラのようにでかい青年Ｕ君が突っ立っている。おもむろに腰に手を回したと思う間もなく、「ハイサイ、ドクトル!」と叫んで、私を180度回転させて、砂の上に叩きつけてくれた。その後、横綱クラスの青年たちが次々と私を手玉にとって転がすのだった。こんな屈辱は医者になって初めてである。その時、Ｇ君が「ヨーバーグゥー（弱虫）ドクトル!」と、笑いながら突っかかってきた。どう見ても私よりは軟弱でモヤシのようにただ伸びただけの体格をしている。私の中に、なにか爆発するものを感じながら、思い切りこの無礼者を受け止めて叩き伏せた。学生時代、柔道をたしなんだせいもあって、こんなヘナ猪口を転がすくらいは朝飯前である。性懲りもなく何回も飛び掛つてくるＧ君を、最後には払い腰で南十字星の方角に投げ飛ばして、「参ったか」と、溜飲を下げた頃には、満月もようやくジャングルの土に皓々と照り輝くほどになっていた。

ジャングル生活もいよいよ終わりに近づいた頃。ある日、そのＧ君がやってきて、「ドクトル、狩にいかんか」という。「狩? なにをやるの?」「アンタよ。アンタ!」。「この野郎、またおれをコケにしやがって! 今度はあばら骨をへし折ってやろうか!」とどやしてやると、なんと、アンタとは南米原産の野獣“バク”のことだという。夢を食うといわれている獏。それがコロニアのあちこちに出没することはきいていた。Ｇ君の森（未開のジャングル）にポーソー（池）があって、そこにいるという。後学のため行くことにした。日が暮れる頃、ハンモック、懐中電灯、五連発銃を持って、森に行く。がっしりした２本の木にハンモックを張って登り、二人で見張っていると、いろいろな動物の足音が聞えてくる。まず、鼠や兎などの小動物がカサコソ。パチパチ、ガサゴソと鹿や猪。蚊が身体中を刺すが、叩いて音を立ててはいけない。１時間ほどすると、ミシミシと重量級の動物の気配。狙うアンタである。予め打ち合わせたとおり、まず銃身に装着してある磁石つきの懐中電灯のスイッチを「一、二、の三」とお互いに肘で合図して一斉に入れる。アンタは突然の光芒に目がくらんで、一瞬棒立ちになる。一人は頭を、一人は胸を狙ってダダーンと撃って、終わり。そのまま、蚊取り線香をつけて、寝る。翌朝、ゆっくり降りて、血痕を辿っていけば、やがて森の中に横たわるアンタを発見することになる。マジックで胴体に月日とハンターの名前を書いて放置したまま帰り、モーソ（使用人）に指示すると担いできてくれる。先に少量の肉をもらって、残り全部をモーソに与えると大喜びして持ち帰っていく。

しかし、こんな後味の悪いスポーツは二度とやりたくない。命を奪うという行為に嫌悪感を覚える。Ｇ君の誘いにはもう乗らないことにした。第一、アンタの肉を食わんでも、コロニアにはもう十分な食料はある。人類共通の天然資源であるボリビアの原生林を剥奪して、農地にしておきながら、なお、遊び心で天然の動物資源を無駄に撃ち殺すなんて、もうできない。

いよいよコロニア生活の終わりが目の前に近づいた頃、ある日、横綱のＡ君がのっそり入って来た。

「ドクトル、魚獲りに行こう]と言う。

「どこに?」

「リオグランデ。ドクトルの送別会を兼ねてだ」。
否応なしの決定事項らしい。

総勢20名の青年たちと2台のカミオン（トラック）に分乗して乾季のリオグランデ河畔に着く。リオグランデとはスペイン語で『大河』という意味だが、名前の通り川幅が1キロメートル以上もあって大きい。乾季でも水面が100メートルはあるが、それでも大アマゾンの一つの支流に過ぎない。1メートル近い魚が川下のアマゾンからたくさん遡上してくる。糸満出身のT君が編んだ地引網を川岸の砂浜からループ状に張る。先ず、横綱クラスの青年たちが網の先頭を持って川上の方へ斜めに入って行く。「ドクトルは、真ん中あたりの網にぶら下がって、魚を逃がさんようにして!」と、G君に言われて、慌てて2メートル幅の網にしがみつく。先頭の横綱たちが下流に向かって網を曲げていくと、せき止められた魚たちが袋の中の鼠同様、浜の近くに群がる。

こちらの腹に激突する魚。ジャンプして網を飛び越える魚。青年たちの叫び。灼熱の太陽。

狭い日本や川もない沖縄では味わえない大陸ならではの豪快なレクリエーションである。捕れた魚と裸の青年たちを積み込んで、カミオンはジャングルの中の暗い道をコロニアに帰って行く。

「荒れて狂うは、あのリオグランデ　俺達やそんなもの　恐れはせぬぞ」

ちょうど40年前の経験だが、若者たちと過ごした2年半のコロニア生活は、今でも鮮やかに記憶にあり、私の脳の中でときどき珠玉のように光って、私を若返らせてくれる。

大河リオグランデは淡水魚の宝庫（1963年）向って右から三人目が筆者

原稿募集！

随筆のコーナー（2,500字以内）
随時、募集いたします。日常診療のエピソード、青春の思い出、一枚の写真、趣味などのほか、紀行文、特技、書評など、お気軽に御寄稿下さい。

随筆

上海紀行
ー「第8回SLE国際会議」に参加してー

医療法人 十全会 おおうらクリニック
（リウマチ科）　大浦　孝

芥川龍之介は「上海游記」で次のように述べている。『上海は支那第一の「悪の都会」だとか云う事です。何しろ各国の人間が、寄り集まっている所ですから、自然そうもなり易いのでしょう。私が見聞しただけでも、風儀は確に悪いようです。たとえば支那の人力車夫が、追剥ぎに早変りをする事なぞは、始終新聞に載っています。又人の話によれば、人力車を走らせている間に、後から帽子を盗まれる事も、此処では家常茶飯事だそうです。』

ところで今回、私共も三泊四日、中国・上海へ出掛けた。当会議は三年に一度、世界各地で開催される全身性エリテマトーデスの病因・病態・治療に的を絞った国際会議である。第一回は、カナダのカルガリーでスタートした。第二回（1989年）のシンガポールでは「沖縄県におけるSLEの臨床的解析」を発表した。第三回（1992年）のロンドンでは「沖縄県におけるSLEの十年間の追跡調査」を発表した。今回は近隣の上海でもあり、最近の仕事をまとめて「急性ループスネフローゼ症候群の治療」としてポスタープレゼンテーションを企画した。金沢大学医学部附属病院リウマチ・膠原病内科長、川野 充弘先生の御指導、御指示により英語に堪能な藤井 博君が発表者となった。ネフローゼ症候群（Class Ⅳ）に対して、薬物療法、血漿交換療法（二重濾過法）、及び血液透析療法（限外濾過法：ECUM）を同時に併用して、急性期を凌ぎ、更には腎機能の回復を目論む新しい治療法として紹介した。

会場は上海国際会議中心（コンベンションセンター）である。会場ではさまざまな衣装や容姿、格好が驚きで、Tシャツにジーンズやリュックにサンダルで家族旅行も兼ねて参加しているという御方も見受けられた。かのSLEの大家、ドクター、ヒューズはユニオンジャックの下、英国スーツを着こなすジェントルマンであった。当日の発表に関しては、喧噪（けんそう）の中で特段の関心や注目度が低かったのは残念であった。国際学会の中でポスタープレゼンテーションの形式にも問題があるかもしれない。

中国最大の都市上海は黄河の支流、黄浦江に跨（また）がって発展している。両岸に旧都市と新都市が広がり、2010年の万博に向けて建設ラッシュである。超高層ビルが林立し、地震がないので百階建てのビルも建設中であった。ニューヨークの摩天楼、マンハッタン島の規模を平面的にも立体的にも凌駕（りょうが）するのではなかろうか。その中心部に威容を誇るランドマークが東方明珠電視タワー（テレビ塔）である。このテレビ塔は高さ468メートルで東洋一、世界でも三位を誇り、上球、中球、下球部分に展望台が設置されており、遠くから外観を眺めても、芸術的な建造物としてユニークでおもしろい。上球の展望台から見下ろす上海の夜景は、ネオンきらめく広大な平野で、その真下には一条の川が流れ、黄浦江リバークルーズの小船がネオンで照り輝いて巡航していた。

タワーの前にある複合ビルにはレストランやショッピングセンターもあり、高級腕時計、有名服飾メーカーが多数入っていたし、日本製衣料店や玩具店、回転寿司もあり、コンビニも日本と変わらないぐらい多かった。そこのレストランで昼食、夕食とも中華料理を食べ、上海料理、北京料理、四川料理などさまざまな種類の中華料理を堪能することができた。料理は豪華であったが驚くほど安かった。

帰路、超高層建築物の街頭、自転車の荷台で、畑より搬入した西瓜（スイカ）の輪切りの薄片を串刺しにして、手ぬぐいで汗を拭（ふ）き拭き、通行人に立ち売りする一人の農夫在り、現在の上海を象徴する風景と思った。

ところで会場に入る前から、近くの大きなビルの屋上の上海海洋水族館の看板に注目し、徒

歩で5分程の距離と見込みを立てていた。幸いにも時間はすぐ工面できた。学会でも、理解困難で、興味が持てないプログラムを割愛し、水族館での「魚類の生態観察」へと振り替える自主プログラムを作成したのである。時間は優に2～3時間はあった。学会のシンポジウム以上に興味をそそられることとなった。

大都会の中心部で、超高層ビルが何と水族館なのである。アジア最大級の規模を誇りアマゾンやアフリカからも魚類を取り寄せているという。階上より地階へ各階に川辺の生き物、海辺の生き物、さんご礁の生き物、深海の生き物と立体的に配置されていた。ただちに、エスカレーターで川から海へ下ることにした。

最初の出迎えは鰐公（ワニ）であった。川辺にたたずむ揚子江鰐は一見生き生きとしていたが実は剥製（はくせい）であった。というのは2～3分、上下左右から観察していたのだが、その間微動だにしなかったのである。

次の間の大部屋の中で、悠々と回遊する一群の紅色斑点帯模様黄金淡水魚類（アロアナの一種）の乱舞は息を呑（の）むほどの圧巻であった。

次の階では、ガラス越しに水中の石庭を観賞していた。数点の岩石を配置し、その昔、拝観した京都の龍安寺を連想させる箱庭と思った。突然、大きくて、太い、黒い、長径1メートルほどの丸太棒の様な岩石がゆらりと動いた。その岩石がこの岩陰からあの岩陰へぬるりと這（は）いずり抜けた。再び静止し、そこの岩石のごとくとなった。ほんの三秒ほどの出来事であった。もしこの三秒を見逃せば、今も前も何の変哲もない箱庭である。動く岩石は大山椒魚（オオサンショウウオ）であった。深山の山間の谷川で静かに健やかに成育したのが捕獲されて、ヒトの観賞用に飼育されているのであろう。見事な擬態で太古の昔から今日まで生き延びた生命に敬意を表した。同時に、今、彼はここで何を考えているのだろうかという妙な妄想に取りつかれたものである。お隣の水槽では、カブトガニがひっくり返って、もがきながらお腹（なか）を見せて笑っているように見えた。また、身動きもせずそのまま死んでいるものもあった。

長さ155メートルの水中トンネルをくぐり抜け、最下層の地階へ下りて、さんご礁の生き物を見ていると、沖縄に帰ったかのごとく安心した。深海の生き物は沖縄の深海魚と同様、暗く、無気味な沈黙の中にあった。その沈黙の中で、先ほどの妄想を打ち消すほどの重圧を感じた。エレベーターで急上昇し元へ戻り街へ出ると、喧噪の中に現実があった。大都市の群集の中で、けし粒ほどの自分を自覚した。徒歩で学会会場に帰り、既に録画されているシンポジウムのDVDを購入予約した。

芥川龍之介は「支那游記」の自序で次のように述べている。「支那游記」一巻は畢竟（ひっきょう）天の僕に恵んだ（或は僕に災いした）Journalist的才能の産物である。僕は大阪毎日新聞社の命を受け、大正10年3月下旬から同年7月上旬に至る120余日の間に上海、南京、九江、漢口、長沙、洛陽、北京、大同、天津などを遍歴した。それから日本へ帰った後、「上海游記」や「江南游記」を一日に一回ずつ執筆した。

文豪に倣って本紀行文を綴（つづ）ってみた。国際会議も上海も想像を絶するほどの企画、規模でその全貌を掌握し描写することは困難で、到底筆の及ぶところではない。いわば群盲象を評するの類であろう。

お知らせ

「2010年版医師日記（手帳）」の購入について

日本医師会から標記医師日記の斡旋方依頼がありますので、お知らせ致します。

購入ご希望の方は10月14日（水）までに、下記注文書により本会迄お申し込み下さい。（TELでも可　098-888-0087　FAXでも可　098-888-0089）

なお、代金は申し込み後、貴口座から引き去り徴収、または請求書を送付いたしますのでご了承下さるようお願いいたします。

記

1. 体　裁　　①表紙　羊皮スウェード（藍色）透明カバー付き
　　役員名簿は別冊とする。
　　縦16.5×横9.25
2. 価　格　　一冊　1,500円送料込み　（引去予定日　12月7日）

---------- キリトリ線 ----------

平成21年　　月　　日

沖縄県医師会行
TEL　098-888-0087
FAX　098-888-0089

「2010年版医師日記（手帳）」注文書

品　　名	単　　価	冊　数	金　　額
2010年版医師日記	1,500円	冊	

上記のとおり注文します

住　所＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

医療機関名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

氏　名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿